The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	滋賀県甲賀郡水口町八田方言における待遇表現の実態：動作の主体に対する表現をめぐって
Author(s)	宮治，弘明
Citation	語文．1985，46，p．33-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68738
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

滋賀県甲賀郡水口町八田方言における待遇表現の実態

――動作の主体に対する表現をめぐって――

宮　治　弘　明

一、はじめに

本稿は、滋賀県甲賀郡水口町八田方言（筆者の出身地の方言）における待遇表現の実態について述べるものである。

当方言には、種々の待遇表現が存在するが、中でも動作の主体に対するものが最も注目される。そこに体系的な枠組みが認められ、しかも、その枠組みが共通語には見られない特殊なものだからである。そこで、その実態報告はそれだけでも幾分かの意味をもつものになると思われる。

一方、待遇表現の研究は、単なる静的な体系記述研究から動的な社会言語学的研究へと進むべきであるという主張が近年強まっている。待遇表現は、言語主体による社会的・心理的関係把握を言語形式に反映したものと考えられる。それゆえ、待遇表現の本質を明らかにするためには、言語外の事実である社会的諸要因と言語形式との関連についての考察が不可欠なものになってくる。特に、地域社会の方言における待遇表現は、日常生活と密着した形で存在するものだけに、なおさらその感が強い。

よって本稿では、動作の主体に対する待遇表現に限定して、その運用の実態とそこに認められる体系的な枠組みを明らかにすると共に、そこに働く社会的・心理的な要因についての考察を加えることを目的とした。

二、調査地と調査方法

調査地の八田集落は、滋賀県南東部、甲賀郡水口町の最北端に位置する農業集落である（図1参照）。当集落は江戸時代からの独立した村としてのまとまりを今でも強く保持している。全戸数七十七戸のうち、他の家と全く親族関係を持たない家が四戸だけという事実や、全人口三百六十二人中、当集落生まれでない者が六十九人だけという事実にもそれは現れている。(注1)

調査方法としては、いわゆるリーグ戦式面接調査法を採用した。(注2)具体的には集落内から六軒の家を選び、その構成員（但し、調査者と小学生以下とを除く）二十九人に、他の人物をどのように待遇す

表① 被調査者一覧表 (1984年現在)

家号(略称)	年齢	性別	職業	学歴	備考
Gonyomon (G)	79	女	無	小	
〃	53	男	会社員	高小	
〃	50	女	会社員	中	
〃	26	男	会社員	高	
〃	21	男	会社員	高	
〃	17	男	高校生		
Kiyomon (K)	85	女	無	小	
〃	51	男	会社員	中	
〃	48	女	会社員	中	
〃	23	男	教員	大	
〃	19	女	会社員	高	
Massyomon (Ma)	85	女	無	小	
〃	62	女	無	小	
〃	57	男	会社員	高小	
〃	32	女	農協職員	高	
〃	31	男	会社員	中	
Mohe (Mo)	73	女	無	女学校	
〃	46	男	農協職員	高	
〃	44	女	公務員	高	町外から嫁入
〃	19	女	短大生		(帰省中)
Syoyomon (S)	73	男	農業	高小	
〃	62	女	無	高小	
〃	38	男	農協職員	中	
〃	32	女	会社員	高	町内の他集落から嫁入
Zenbe (Z)	82	男	無	小	
〃	53	男	農協職員	高小	
〃	51	女	主婦	中	
〃	22	男	大学生		
〃	19	男	専門学校生		

図1. 調査地点

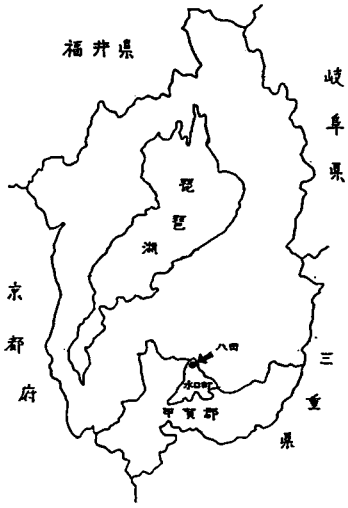
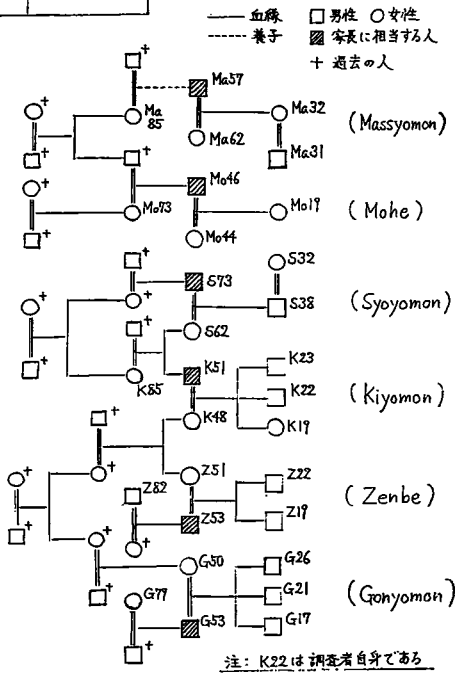


図2. 各家の関係図



るかを内省発話してもらう、というものである。表①は被調査者一覧表、図2は六軒の家の関係図である。なお、Mo家は当集落で伝統的に最も有力な家と認められている家である。

さて、面接調査に用いた質問の内容は次の二つである。

Ⅰ、道で○○さんと一対一で出会った時、「どこへ行くのか」とたずねるとしたらどんな言い方をするか。

Ⅱ、調査者と一対一で話をしている時、「○○は明日旅行に行く」と調査者に伝えるとしたらどんな言い方をするか。

Ⅰは話し相手に対する待遇表現を、Ⅱは第三者に対する待遇表現を調べるためのものである。なお、質問内容の○○に入れる人間として当集落の寺の住職とその妻（共に大阪府貝塚市の出身）を重要人物としてつけ加えた。

ところで、調査の際には、被調査者がなかなか明確な答えを示してくれないということも実はあった。その場合には、新たな場面を設定したり、予想される語形を与えてみたりして被調査者の内省を促すようにした。

今回の調査は、自然会話ではなく被調査者の内省発話を記録するという方法をとっている。そのため、当方言の待遇表現の実状を正確に反映しているとは言い難い面がある。しかしながら体系的な枠組みを見出すためには、ひとまず、自然会話に現れる言語運用の「ゆれ」を考察の対象に入れない方がよい場合が多い。それゆえ、今回の研究では内省発話のみを考察の対象としたわけである。なお、調査者自身も当集落の生え抜きなので、自らの内省を調査及び考察において充分活用することにした。

三、話し相手に対する待遇

話し相手に対する待遇については、Ⅰの質問に対する回答のうち、「行くのか」にあたる部分を考察の対象とする。その際、待遇表現を素材待遇と対者待遇とに二分する立場をとり、「行くのか」をさらに「行く」と「のか」とに分けて考察することにした。表②は、面接調査で得られた資料から「行く」の部分を取り出したものであり、表③は、「のか」にあたる部分を取り出したものである。表は、話し手（被調査者）を横に、話し相手を縦に、いずれも年齢順に並べたものである。年齢は数字によって、各人が所属する家の名はローマ字の略記号で示してある。また、女性は数字を丸で囲んである。なお、話し相手の欄のT61は寺の住職であり、T㊾はその妻を表している。

以下、表②と表③をもとにして、当方言の話し相手に対する待遇表現の実態を明らかにしていくことにする。

(一) 動作を表す部分による待遇

表②からまず指摘できることは、「イク」という語形が大部分を占めているということである。表②における各語形の用例数をあげると次のようになる。

○イク　（七三四例）
○イカハル　（一二五例）
○イカル　（五例）
○イキナハル　（三例）
○イカレル　（二例）
○オデカケ　（一例）

表② 話し相手の動作（「行く」）を表す部分

話し手 ↙ 話し相手 ↘	Ma 85 女	K 85 女	Z 82 男	G 79 女	S 73 男	Mo 73 女	S 62 女	Ma 62 女	Ma 57 男	Z 53 男	G 53 男	K 51 男	Z 51 女	G 50 女	K 48 女	Mo 46 男	Mo 44 女	S 38 男	S 32 女	Ma 32 女	Ma 31 男	G 26 男	K 23 男	Z 22 男	G 21 男	Mo 19 女	Z 19 男	K 19 女	G 17 男
Ma 85		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	△	○	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
K 85	○		○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	⊕	○	○	○	▲	○	△	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
Z 82	△	○		○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	▲	○	▲	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
G 79	○	○	○		○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	▲	○	△	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
S 73	△	○	○	○		▲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
Mo 73	○	△	○	△	○		△	○	○	○	○	△	△	△	○	○	⊕	○	△	○	○	○	○	○	△	○	○	△	○
S 62	○	○	○	○	○	△		○	○	○	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
Ma 62	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Ma 57	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	△	○	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Z 53	△	○	○	○	○	▲	○	○	○		○	○	○	○	○	○	▲	○	▲	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
G 53	△	○	○	○	○	▲	○	○	○	○		○	○	○	○	○	▲	○	▲	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
K 51	△	○	○	○	○	▲	○	○	○	○	○		⊕	○	○	○	▲	○	△	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
Z 51	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○		○	○	○	△	○	▲	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
G 50	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○		○	○	△	○	△	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
K 48	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○		○	△	○	△	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
Mo 46	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○		○	○	▲	○	○	○	○	○	△	○	○	△	○
Mo 44	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	○	○		○	△	○	○	○	○	○	△	○	○	△	○
S 38	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△		○	○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
S 32	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	⊕	○	○	○	△	○		○	○	○	○	○	○	▲	○	○	○
Ma 32	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
Ma 31	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○		○	○	○	○	▲	○	△	○
G 26	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	△	○	○		○	○	○	○	○	○	○
K 23	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
Z 22	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
G 21	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
Mo 19	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
Z 19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
K 19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
G 17	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
T 61	⬡	△	○	△	△	<	○	△	○	△	△	△	△	△	△	○	▲	○	▲	△	△	△	○	○	▲	♟	○	△	○
T 57	⬡	△	○	△	△	⬡	○	△	○	⊕	△	△	△	△	△	○	▲	○	▲	△	△	△	○	○	▲	♟	○	△	○

［凡例］

○ イク
△ イカハン
▲ イカハリ
▲ イカハル
（イカハル）
⊕ イカン（イカル）
⬡ イキナハン（イキナハル）
♟ イカレル
< オデカケ

表③　文末部による話し相手待遇

話し相手 ＼ 話し手	Ma 85 女	K 85 女	Z 82 男	G 77 女	S 73 男	Mo 73 女	S 62 女	Ma 62 女	Ma 57 男	Z 53 男	G 53 男	K 51 男	Z 51 女	G 50 女	K 48 女	Mo 46 男	Mo 44 女	S 38 男	S 32 女	Ma 32 女	Ma 31 男	G 26 男	K 23 男	Z 22 男	G 21 男	Mo 19 女	Z 19 男	K 19 女	G 17 男
Ma 85	＼	∧	∧	∧	⋀	○	○	∧	∧	⋀	△	∧	△	∧	△	△	○	△	▲	△	△	△	△	⬢	○	○	△	○	△
K 85	◇	＼	⋁	∧	⋀	○	∧	△	∧	⋁	△	△	○	∧	△	⋁	●	∨	△	△	○	△	△	△	△	●	△	△	△
Z 82	◇	∧	＼	∧	⋀	○	∧	○	∧	▽	△	△	△	∧	△	△	●	△	●	△	∧	△	△	△	○	●	△	△	△
G 77	∧	∧	∨	＼	⋀	○	○	∧	∧	⋀	▽	∧	○	∧	△	△	●	△	△	△	○	▽	△	⬢	△	●	△	○	▽
S 73	◇	∧	▽	∧	＼	●	△	○	∧	⋀	△	△	○	∧	△	△	●	▽	△	△	○	△	△	⬢	○	⬢	△	△	△
Mo 73	∨	◇	∧	◇	⋁	＼	△	○	∧	⋀	△	△	○	○	△	△	○	△	△	△	○	△	△	⬢	○	△	○	○	△
S 62	◇	▽	∧	⋁	⋁	○	＼	○	∧	⋀	△	▽	○	△	△	△	●	▽	△	△	○	△	△	⬢	○	⬢	○	△	△
Ma 62	∧	▽	∨	▽	⋁	○	○	＼	⋁	⋁	▽	△	○	△	△	△	○	▽	△	△	▽	△	△	⬢	○	⬢	△	○	△
Ma 57	⋁	∧	∨	∧	⋁	○	○	∧	＼	⋁	△	△	○	△	△	△	○	△	●	△	△	△	△	⬢	○	⬢	△	○	△
Z 53	◇	∧	⋁	∧	⋁	●	○	∧	∨	＼	▽	△	△	∧	△	△	●	△	●	△	△	△	△	△	○	⬢	△	△	△
G 53	◇	∧	∨	∧	⋁	●	○	∧	∨	⋁	＼	▽	△	∧	△	△	●	△	▲	△	△	▽	△	⬢	△	⬢	△	○	▽
K 51	◇	∧	⋁	∧	⋁	●	△	∧	∨	⋁	▽	＼	○	∧	△	△	●	△	△	△	△	△	△	○	△	⬢	△	△	△
Z 51	∧	∧	∨	▽	⋁	○	○	⋁	∨	⋁	▽	⋁	＼	△	△	⋁	○	△	●	△	△	△	△	△	○	⬢	△	△	△
G 50	◇	∧	∨	∧	⋁	○	○	∧	∨	⋁	▽	▽	△	＼	△	△	○	△	△	△	○	▽	△	⬢	▽	⬢	△	○	▽
K 48	◇	∧	▽	▽	⋁	○	△	⋁	∨	⋁	▽	▽	△	∧	＼	⋁	○	△	△	△	○	△	△	○	△	⬢	△	△	△
Mo 46	▽	∧	▽	◇	⋁	○	○	○	∨	⋁	▽	▽	△	○	△	＼	○	∧	●	△	△	△	△	⬢	○	△	○	○	△
Mo 44	⋁	◇	⋁	◇	⋁	○	○	○	∨	⋁	○	⋁	○	○	△	▽	＼	⋁	○	△	○	△	△	⬢	○	△	○	○	△
S 38	◇	∨	∨	⋁	⋁	○	△	○	∨	⋁	▽	▽	○	△	△	⋁	○	＼	△	△	△	△	△	○	○	⬢	△	△	△
S 32	⋁	∨	∧	∧	⋁	○	△	○	∨	⋁	○	▽	○	○	△	⋁	○	▽	＼	△	○	△	△	⬢	○	⬢	○	○	△
Ma 32	▽	∧	∨	⋁	⋁	○	○	▽	⋁	⋁	▽	⋁	○	○	△	⋁	○	⋁	△	＼	⋁	△	△	⬢	○	⬢	△	△	△
Ma 31	⋁	∧	∨	⋁	⋁	○	○	∨	⋁	⋁	▽	▽	○	○	△	⋁	○	⋁	△	△	＼	△	△	△	○	⬢	△	○	△
G 26	◇	∧	∨	⋁	⋁	○	○	○	▽	⋁	▽	▽	○	▽	△	⋁	○	▽	△	△	▽	＼	△	△	▽	⬢	△	○	▽
K 23	◇	∨	▽	⋁	⋁	○	△	⋁	⋁	⋁	▽	▽	⋁	○	▽	⋁	○	▽	○	△	⋁	△	＼	△	△	⬢	△	△	△
Z 22	∧	∨	▽	⋁	⋁	○	○	⋁	⋁	⋁	▽	▽	⋁	⋁	▽	⋁	○	▽	○	△	▽	▽	▽	＼	▽	○	△	△	△
G 21	∧	∨	∨	⋁	⋁	○	○	○	▽	⋁	▽	▽	⋁	▽	▽	⋁	○	▽	○	△	▽	▽	▽	▽	＼	○	△	△	▽
Mo 19	▽	⋁	⋁	○	⋁	○	○	○	▽	⋁	○	▽	○	○	△	⋁	○	⋁	○	△	⋁	▽	▽	▽	▽	＼	△	○	△
Z 19	∧	∨	∨	▽	⋁	○	○	⋁	⋁	⋁	▽	▽	⋁	⋁	▽	⋁	○	▽	○	△	▽	▽	▽	▽	▽	○	＼	△	▽
K 19	∧	⋁	▽	⋁	⋁	○	△	▽	⋁	⋁	▽	▽	⋁	○	▽	⋁	○	∨	○	△	⋁	▽	▽	▽	▽	○	▽	＼	△
G 17	∧	∨	∨	⋁	⋁	○	○	○	▽	⋁	▽	▽	⋁	▽	▽	⋁	○	▽	○	△	▽	▽	▽	▽	▽	△	▽	△	＼
T 61	◇	◇	∧	⊕	◇	⬢	○	◇	○	○	⊕	△	⊕	○	△	△	●	△	●	○	△	○	△	⬢	●	⬢	○	○	⬢
T 57	◇	⊕	∧	⊕	⊕	⬢	○	⋁	○	○	○	△	○	○	△	△	●	△	●	○	○	○	△	⬢	●	⬢	△	○	⬢

［凡例］

∧ ノエ　　△ ネー　　⊕ ネナ　　⬢ ドス・カ

⋁ ノヤ　　▲ マス・ネー　　○ ノ

⋀ ネエ　　▽ ネ　　● マス・ノ

⋁ ネヤ　　◇ ネヤナ　　⬢ ンデス・カ

※黒の記号は丁寧語を含むものである

特に、30代以上の人物に対しても、敬語（いわゆる尊敬語）を用いることは稀である点が注目される。これにより、当方言では、話し相手の動作をふつう、待遇的に中立な語形で表現すると見做すことができる。それゆえ、話し相手の動作に対して敬語が用いられる場合には、そこに何らかの社会的要因が関与しているものと思われる。

まず、誰に対して敬語が用いられるかという面から表②を見てみよう。最も多く用いられるのは寺の住職とその妻である。これは、当集落内での寺の地位の高さを反映したものと考えられる。寺と壇家との間には、恩恵を与える側と受ける側という関係が成立しており、これが言語行動を規定する要因となるわけである。さて、被調査者の中で敬語を最も多く用いられる人物は、Mo㉓である。ここに働いているのは有力な家への配慮、すなわち社会的階層に関する要因と考えられる。しかし、この要因は今やその効力を失いつつあると見做すことができる。なぜなら、家長に相当するMo46に対してはあまり敬語が用いられていないからである。ところで、Mo㊹とS㉜は自分の夫よりも多く敬語を用いられている。これを説明するには、この2人だけが持つ要因、すなわち当集落の生え抜きではないという点（表①参照）を考慮しなければならないであろう。これにより、出身地の問題（当集落の生まれであるかどうか）を重要な要因のひとつとして指摘することができる。特に、Mo46とMo㊹とを比較することによって、出身地という要因は、社会的階層という伝統的な要因よりも強い規定力を持つようになったと見做してよいと思われる。

次に、敬語を用いる側から考察してみよう。表②の敬語の用例数を男女別に分けてみると男性が十八例に対し女性が一一八例となる。この点から、敬語使用に関して男女差、すなわち男性よりも女性の方が敬語を多く用いる傾向を指摘できる。中でも、Mo㊹・S㉜・Mo㉓・Mo⑲の四人は、特に敬語を多く用いる人物として注目される。これらの人物は、当方言の普通の待遇表現体系に合致しない特異な存在である。そこには、先にあげた出身地及び社会的階層という要因が関与しているものと考えられる。

㈡　丁寧語による待遇

表③においていわゆる丁寧語として認められるものは、「デス」・「マス」・「ドス」の三語形であり、その用例数は次のとおりである。

○デス　（三五例）
○マス　（二八例）
○ドス　（　二例）

また、被調査者二十九人のうち丁寧語を用いるのは七人だけである。これにより、当集落では丁寧語による待遇がまだ定着していないと見做すことができる。この状況は、集落構成員間の関係がそれだけ親密であることを示すとともに、次項で述べる文末助詞による待遇の存在を予想させるものと言えよう。すなわち、文末助詞による待遇体系が確立されているが故に、丁寧語による待遇をあまり必要としないと考えるわけである。

㈢　文末助詞による待遇

方言において文末助詞・間投助詞が待遇表現としての機能を有するということは早くから指摘されている。西宮一民氏は、「助詞待遇」という語を用い、その体系は「他の人称待遇や助動詞待遇に比べて、案外本来的なそして主体的な力をもっているということが言える」と述べておられる。(注3)

さて、表③の中で文末助詞として認めたものは、「ノエ」・「ノヤ」・「ネエ」・「ネヤ」・「ネー」・「ネ」・「ネヤナ」・「ネナ」・「ノ」・「カ」の十語形である。なお、「ネ」は文末下降調、その他は全て文末上昇調のイントネーションを持っている。

ところで、これらの語形は表③においてあまり有意味な分布をしているようには見えない。そこで、対人関係を規定する一要因である親疎関係の観点から、これらの語形を「親の表現」と「疎の表現」とに二分してみよう。

なお、「親の表現」とは、両者の関係が親密な場合に用いられる語形であり、それは家族内で用いられるものに代表される。一方、「疎の表現」とは、両者の間に一定の距離がおかれている場合に用いられる語形であり、それは寺の住職に対して用いられるものに代表される。表④は、家族に対してどの文末助詞が用いられるかを示したものであり、表⑤は寺の住職に対してどの文末助詞が用いられるかを示したものである。これをもとにして、先述の文末助詞十語形を二分するならば次のようになると思われる。

◎親の表現

「ノエ」・「ノヤ」・「ネヤ」・「ネエ」・「ネー」・「ネ」

◎疎の表現

「ネヤナ」・「ネナ」・「ノ」・「カ」

なお、「ネエ」は表④にも表⑤にも出てこない語形であるが、寺の住職に対して用いられていないという点を重視して「親の表現」と見做すことにした。

さて、表③における各語形の用例数は次のようになっている。

◎親の表現　（六〇一例）

○ノエ　（　六八例）
○ノヤ　（　三五例）
○ネエ　（　　九例）
○ネヤ　（一一三例）
○ネー　（二五九例）
○ネ　　（一一七例）

◎疎の表現　（二六九例）

○ネヤナ　（　二二例）
○ネナ　（　　六例）
○ノ　　（二〇四例）
○カ　　（　三七例）

つまり、文末助詞待遇にも当集落の人間関係の親密さが現れていると言える。

次に、各語形の使用状況をもとにして、それぞれの性質・意味・用法を明らかにしてみよう。表⑥は各語形が誰に対して用いられるかを、一方、表⑦は各語形を誰が用いるかを示したものである。これらをもとにして各語形についてまとめるならば次のようになる。

○ノエ――使用者は50代以上が中心。女性が多く用いる。上向き待遇（相手を自分より上位に遇するもの）。親の表現。

○ノヤ――使用者は50代以上が中心。男性が多く用いる。下向き待遇（相手を自分より下位に遇するもの）。親の表現。

○ネエ――使用者はS73・Z53。上向き待遇。親の表現。

○ネヤ――使用者は30代以上。男性が多く用いる。下向き待遇。親の表現。

○ネー――使用者は40代以下が中心。男女の使用差はあまり見ら

表④　家族に対してどの文末助詞を用いるか

話し手＼語形	ノエ	ノヤ	ネヤ	ネー	ネ	ノ
Ma 85 女	○		○		○	
K 85 女	○	○	○			
Z 82 男		○			○	
G 79 女	○		○			
S 73 男			○			
Mo 73 女						○
S 62 女				○		
Ma 62 女	○	○			○	
Ma 57 男	○		○			
Z 53 男			○		○	
G 53 男					○	
K 51 男				○	○	
Z 51 女			○	○		
G 50 女	○				○	
K 48 女				○	○	
Mo 46 男			○	○	○	
Mo 44 女						○
S 38 男					○	
S 32 女				○		
Ma 32 女				○		
Ma 31 男			○	○	○	
G 26 男					○	
K 23 男				○	○	
Z 22 男				○	○	
G 21 男				○	○	
Mo 19 女				○		
Z 19 男				○		
K 19 女				○		
G 17 男					○	

表⑤　住職(T61)に対してどの文末助詞を用いるか

話し手＼語形	ノ	カ	ネヤナ	ネナ	ノエ	ネー
Ma 85 女			○			
K 85 女			○			
Z 82 男					○	
G 79 女				○		
S 73 男			○			
Mo 73 女		○				
S 62 女	○					
Ma 62 女			○			
Ma 57 男	○					
Z 53 男	○					
G 53 男				○		
K 51 男						○
Z 51 女				○		
G 50 女	○					
K 48 女						○
Mo 46 男						○
Mo 44 女	○					
S 38 男						○
S 32 女	○					
Ma 32 女	○					
Ma 31 男						○
G 26 男	○					
K 23 男						○
Z 22 男		○				
G 21 男	○					
Mo 19 女		○				
Z 19 男	○					
K 19 女	○					
G 17 男		○				

表⑥　各語形は誰に対して用いられるか　（文末助詞）

話し相手＼語形	カ	ネヤナ	ネナ	ノエ	ノヤ	ノ	ネヤ	ネエ	ネー	ネ
Ma 85	1			7		6		2	12	
K 85		1		4	1	5	3	1	13	
Z 82		1		6		6		1	13	1
G 79	1			6	1	7		2	8	3
S 73	2	1		4		6		1	12	2
Mo 73	1	2		2	1	8	1	1	12	
S. 62	2	1		2		7	2	1	10	3
Ma 62	2			1	1	6	3		10	5
Ma 57	2			3	1	7	3		12	
Z 53	1	1		4	2	5	1		13	1
G 53	2	1		4	2	4	2		10	3
K 51	1	1		4	1	4	3		13	1
Z 51	1			2	2	5	5		11	2
G 50	2	1		3	2	5	2		8	5
K 48	1	1		2	1	4	4		11	4
Mo 46	1	1		2	1	9	2		8	4
Mo 44	1	2			1	11	6		6	1
S 38	1	1			3	6	4		11	2
S 32	2			2	2	10	4		6	2
Ma 32	2			1	1	6	8		7	3
Ma 31	1			1	2	7	7		8	2
G 26	1	1		1	1	6	4		6	8
K 23	1	1			1	4	8		8	5
Z 22				1	1	5	8		4	9
G 21				1	2	6	5		3	11
Mo 19						10	7		4	7
Z 19				1	2	5	7		2	11
K 19				1	1	5	8		3	10
G 17				1	2	5	5		3	12
T 61	4	3	3	1		10			6	
T 59	4	1	3	1		11	1		6	

注：数字は使用回数を示す

表⑦　各語形は誰が用いるのか　（文末助詞）

話し手＼語形	カ	ネヤナ	ネナ	ノエ	ノヤ	ノ	ネヤ	ネエ	ネー	ネ
Ma 85		14		8	1		4			3
K 85		3	1	15	7		2			2
Z 82				6	14		4			6
G 79		3	2	10		1	10			4
S 73		1	1				24	4		
Mo 73	2					28				
S 62				2		20			8	
Ma 62		1		7	1	12	6		1	2
Ma 57				7	10	2	7			4
Z 53						2	22	5		1
G 53			1			4			7	18
K 51				2			3		9	16
Z 51			1			16	6		7	
G 50				9		11	2		5	3
K 45									24	6
Mo 46							15		14	1
Mo 44						30				
S 38				1	2		4		13	10
S 32						15			15	
Ma 32						2			28	
Ma 31				1		10	4		9	6
G 26						2			19	9
K 23									24	6
Z 22	15					3			7	5
G 21						17			6	7
Mo 19	18					8			4	
Z 19						6			22	2
K 19						15			15	
G 17	2								22	6

れない。上向き待遇。親の表現。
○ネ　——使用者は50代以下が中心。男性が多く用いる。下向き待遇。親の表現。
○ネヤナ——使用者は60代以上。女性が主に用いる。上向き待遇。疎の表現。
○ネナ——使用者は50代以上。女性が多く用いる。上向き待遇。疎の表現。
○ノ　——使用者は60代以下が中心。特に女性が多く用いる。疎の表現。
○カ　——使用者は20代の学生が中心。男女の使用差はない。常に丁寧語を伴うことから、これ自体は待遇的な意味合いを持たないと見做すこともできる。

これにより、文末助詞の運用に関しても性別という要因が強く働いていることが明らかとなる。すなわち、男性より女性の方が丁寧な表現を好む傾向（上向き待遇の選択）にあり、かつ相手との間に距離を置こうとする傾向（疎の表現の選択）にあると言える。

また、各語形と使用者の年代との間には密接な関連が見られる。特に、親の表現の六語形の場合には、上向き待遇と下向き待遇とでそれぞれ次のような語形変化を想定できる。

○ノエ→ネエ→ネー　（上向き待遇）
○ノヤ→ネヤ→ネ　（下向き待遇）

一方、疎の表現に関しては、「ネヤナ」と「ネナ」が用いられていたところへまず「ノ」が外部から持ちこまれ、さらに今また丁寧語を伴う「カ」が若年層で用いられ始めたという状況にあると言えよう。

当方言における文末助詞待遇は、正に話し相手に対する待遇の中心となるものである。しかもそれは体系的にとらえることができるものである。これは、当方言の大きな特徴のひとつと言えるだろう。

四、第三者に対する待遇

第三者に対する待遇の場合、考察の対象となるのは、Ⅱの質問に対する回答の中で「行く」に対応する部分である。そこで、その部分を取り出してみると表⑧のようになる。表は横に話し手、縦に話題となる第三者を年齢順に並べたものである。各語形の用例数を示すならば次のようになる。

○イカル　（六〇五例）
○イッキョル　（一八八例）
○イカハル　（七六例）
○イク　（一例）

表⑧は、先に掲げた表②とは全く異なる語形分布を示している。特に、「イク」がわずか一例だけになり、代わって「イカル」が大きな割合を占めていること、さらに「イッキョル」という新しい語形が現れていることが注目される。

まず、「イッキョル」について説明しよう。この語形は、助動詞「ヨル」が接続したもの（イキョル）に由来する。表⑧の分布が示すように、これが話し手より年上の人物に対して用いられるのは特殊な場合（第三者が話し手の妻や兄姉である場合）がほとんどである。つまり、一般には話し手より年下の人物に用いられるべき表現、すなわち、上向き待遇に対応する下向き待遇の表現としてこの語形

表⑧　話題となる第三者の行動（「行く」）を表す部分

話題の人物 ＼ 話し手	Ma 85 女	K 85 女	Z 82 男	G 77 女	S 73 男	Mo 73 女	S 62 女	Ma 62 女	Ma 57 男	Z 53 男	G 53 男	K 51 男	Z 51 女	G 50 女	K 48 女	Mo 46 男	Mo 44 女	S 38 男	S 32 女	Ma 32 女	Ma 31 男	G 26 男	K 23 男	Z 22 男	G 21 男	Mo 19 女	Z 19 男	K 19 女	G 17 男
Ma 85		◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆
K 85	◆		◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
Z 82	◆	◆		◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
G 77	◆	◆	◆		◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
S 73	◆	◆	◆	◆		△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
Mo 73	◆	◆	◆	◆	⊡		◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆
S 62	◆	◆	◆	◆	⊡	△		◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
Ma 62	◆	◆	◆	⊡	⊡	△	◆		⊡	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆
Ma 57	◆	◆	◆	◆	⊡	△	◆	◆		◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆
Z 53	◆	◆	◆	◆	⊡	△	◆	◆	◆		◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
G 53	◆	◆	◆	◆	⊡	△	◆	◆	◆	◆		◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
K 51	◆	◆	◆	◆	⊡	△	◆	◆	◆	◆	◆		◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
Z 51	◆	◆	◆	◆	⊡	△	◆	◆	◆	⊡	⊡	◆		◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
G 50	◆	◆	◆	◆	⊡	△	◆	◆	◆	⊡	⊡	◆	◆		◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
K 48	◆	◆	◆	◆	⊡	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆		◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
Mo 46	◆	◆	◆	◆	⊡	◆	◆	◆	◆	◆	⊡	◆	◆	◆	◆		△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆
Mo 44	◆	◆	◆	◆	⊡	◆	◆	◆	◆	◆	⊡	◆	◆	◆	◆	◆		◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆
S 38	◆	◆	◆	⊡	⊡	△	◆	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	◆	◆	◆	⊡	△		◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
S 32	◆	◆	◆	◆	⊡	△	◆	◆	◆	⊡	⊡	⊡	◆	◆	◆	◆	△	⊡		◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
Ma 32	⊡	◆	◆	⊡	⊡	△	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	◆	◆	◆	◆	⊡	△	⊡	◆		⊡	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆
Ma 31	◆	◆	⊡	◆	⊡	△	◆	◆	⊡	⊡	⊡	◆	◆	◆	◆	⊡	△	⊡	◆	◆		◆	◆	◆	◆	◇	◆	◆	◆
G 26	◆	◆	⊡	⊡	⊡	△	◆	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	△	⊡	◆	◆	⊡		◆	◆	⊡	△	◆	◆	⊡
K 23	◆	◆	⊡	⊡	⊡	△	◆	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	◆	◆	⊡	△	⊡	◆	◆	⊡	⊡		◆	◆	◆	◆	◆	◆
Z 22	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	△	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	△	⊡	◆	◆	⊡	⊡	⊡		⊡	◆	⊡	◆	◆
G 21	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	△	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	△	⊡	◆	◆	⊡	⊡	⊡	⊡		◆	⊡	◆	⊡
Mo 19	◆	◆	⊡	◆	⊡	◆	◆	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	◆	◆	◆	⊡	○	⊡	◆	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡		⊡	◆	◆
Z 19	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	△	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	△	⊡	◆	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	◆		◆	⊡
K 19	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	△	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	◆	⊡	⊡	△	⊡	◆	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	◆	⊡		◆
G 17	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	△	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	△	⊡	◆	◆	⊡	⊡	⊡	⊡	⊡	◆	⊡	◆	
T 61	△	◆	◆	△	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆
T 57	△	◆	◆	△	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	△	◆	◆	◆

注：話し相手は調査者（K22）である

［凡例］　○ イク　　◆ イカル

△ イカハル　　⊡ イッキョル（イキヨル）

は存在するわけである。

次に、上向き待遇としての「イカル」と「イカハル」との関係について考えてみよう。表②と表⑧とを比較すると、表②の「イカハル」の用例中過半数が表⑧では「イカル」となっている。また、表⑧においても「イカハル」を用いるのは二十九人中五人だけであり、そのうち三人が表②においても特異な存在であったMo家の女性である。これにより、当方言の第三者に対する上向き待遇には普通は「イカル」が用いられるものと考えてよいと思われる。

以上のことから、第三者の動作を表す場合、当方言では待遇的に中立な語形が用いられることがなく、代わりに待遇的な意味を明確に示す語形、すなわち「イカル」か「イッキョル」が用いられると言うことができよう。

ここで、表⑧をもとに各語形の実態をもう少し細かく見ることにする。

まず、「イッキョル」の運用をめぐって、男女差を指摘することができる。全用例のうち男性が一四八例を占めるのに対し、女性はわずかに四〇例を数えるのみである。さらに、「イッキョル」を一度も用いない人物というのも全て女性である。ここからも、女性は男性よりも下向き待遇を嫌う傾向にあると言うことができよう。また、被調査者中の八組の夫婦（図2参照）に注目してみると、夫と比較して妻の方が「イッキョル」で待遇されることが多いことがわかる。これは、当集落内での夫と妻との社会的な地位評価の差を反映しているものと考えられる。但し、S家の若夫婦の場合にはS㉜が他地域の出身者であるという別の要因が強く働くために、夫であるS38の方が「イッキョル」で待遇されることが多い。

次に、「イカル」と「イカハル」の運用をめぐる問題を取り上げる。ひとつは、Mo⑲が老中年層の女性から「イカル」で待遇されることが多いという問題である。これは、Mo家に対する配慮が女性の間には依然として強く働いていることを示すものと言えよう。もうひとつは、Ma㉕とG㉙がT61とT㊾に対してだけ「イカハル」を用いるという問題である。これは、当集落内での寺の地位が高いこと、また、寺が別格的な扱いをされうる存在であることを示していると考えられる。

ところで、表⑧の中で特異な運用パターンを示しているのはMo家の三人の女性であるが、Mo㊹と他の二人との間には大きな違いが見られる。すなわち、後者が「イカル」を用いることがあるのに対し、前者は「イカハル」と「イク」しか用いないという待遇体系上の差異がそれである。ここにはやはり出身地という要因が絡んでいると考えられる。この点からも、当方言の第三者に対する普通の上向き待遇の語形としては「イカハル」ではなく「イカル」を採用するのが妥当であると言えそうである。

さらに、表②と表⑧との比較から、S㉜の運用パターンも特異であることがわかる。他地域出身のS㉜は表②では例外的な存在であった。ところが、表⑧では当方言の待遇体系に合致した語形運用をしているのである。同じく他地域出身であるMo㊹が、表⑧においても特異なパターンを示すことを考え合わせると、次のことが予想される。すなわち、S㉜の出身地（水口町内の他集落）においても第三者に対する待遇表現の語形として「イカル」が用いられているということである。これに関する問題については、次章において述べることにする。

五、待遇表現の枠組み

これまでの考察から、八田方言における動作の主体に対する待遇表現には、一定の体系的な枠組みが存在することがわかる。

それは、話し相手待遇の場合には、その動作に対しても素材待遇語を用いず対者待遇語のひとつである文末助詞のみで済ます一方、第三者待遇の場合には、必ず素材待遇語を用いるものとしてとらえることができる。つまり、話し相手の動作を表す部分には待遇的に中立な語形を用いるのに対し、第三者の動作を表す部分には必ず待遇的意味を明確に持つ語形を用いるのである。(注4) 具体的な語例によってその枠組みを示すならば表⑨のようになる。

さて、表⑨で注目すべき点は、五段活用動詞以外の動詞には第三者に対する上向き待遇（敬意表現）として複数の語形が存在するということである。特に、「来る」の場合には「ワス」、「キラル」、「キャル」の三語形が存在する。「ワス」は当集落で普通に用いられる唯一の敬語動詞であり、過去形になると特殊なサ行イ音便の形（ワシター→ワイサ）を取るという特徴を持つ。「キラル」は、敬語助動詞「ル・ラル」の「ラル」が接続したものであり、一方「キャル」は、敬語助動詞「ル・ヤル」の「ヤル」が接続したものである。以下、この問題について考察していくことにする。

まず、各語形の運用の実態を示そう。第三者の「来る」・「する」・「行く」という動作を上向き待遇で表す場合に用いる語形を、今回の被調査者全員に内省発話してもらった。その結果をまとめたものが表⑩である。これにより、第三者の上向き待遇に用いられる語形の違いには、年齢という要因が深く関っているということがわかる。それゆえ、第三者の上向き待遇に用いられる語形については、

ワス		（来る）
シラル		（する）
イカル		（行く）

⇩

キラル		（来る）
シラル		（する）
イカル		（行く）

⇩

キャル		（来る）
シャル		（する）
イカル		（行く）

という変化を想定できることになる。

この語形変化は次のように解釈される。まず、「ワス」から「キラル」への変化は、待遇表現の単純化と見做すことができる。つまり、動詞による待遇と助動詞によるものとが併存する状態から、助動詞による待遇のみの状態へと移行したと考えるわけである。これは、体系的な観点から見れば例外的表現の削除と言うこともできる。一方、「キラル」から「キャル」への変化は、「ル・ラル」敬語から「ル・ヤル」敬語への移行という、体系的な変化としてとらえるべきものである。なお、「ル・ヤル」敬語は水口町の他の集落で広く用いられているものである。それは、表⑩の中でS㉜が使用語形としてあげていることからもうかがえる。

さて、表⑩は「ル・ヤル」敬語が主に10代の間で用いられていることを示している。それゆえ、この「ル・ラル」から「ル・ヤル」への移行の要因を考える場合、学校生活における言語行動の影響を見逃がすことはできないであろう。そこで、それを確かめるために水口町全域を学区とする水口中学校の生徒九十六名を対象にアンケート調査を行った。対象者の条件は、本人及び親のどちらかが同町の生え抜きであるということである。まず、彼らが学校で友人に向かって「先生が来た」と言う場合、両語形の使用状況は次のようになる。

○ル・ヤル　（八〇人）
○ル・ラル　（一人）
○その他　（一五人）

一方、彼らの親が家庭で「近所の人が来た」と言う場合、両語形の使用状況は次のようになる。

○ル・ヤル　（八二人）
○ル・ラル　（八人）
○その他　（六人）

この結果は、「ル・ヤル」が調査地を含む水口町全域の第三者に対する上向き待遇において最も有力な語形であること、またその勢力ゆえ、「ル・ヤル」は今や「学校共通語」とでも呼ぶべき地位を占めるようになっていることを示すものと言えよう。当集落での「ル・ヤル」敬語の使用は、こうした周辺地域の状況と密接な関連を持っていると考えてよい。10代にとって学校生活は一日の中で最も大きな部分を占めるものであること、言語行動に関しては親よりも同年代の影響の方が大であることが表⑩やアンケートの結果から言えることなどが、この解釈の裏づけとなりうるであろう。そして、今後当集落における「ル・ヤル」敬語の使用は、若年層を中心としていっそう増加していくものと思われる。

八田方言における待遇表現の枠組みは、共通語の観点からすれば奇異なるものと言わざるをえない。しかし、話し相手待遇は対者待遇語だけでも十分であり、一方、第三者待遇には素材待遇語が不可欠だという観点に立つならば、この枠組みは合理的かつ能率的なものと見做すこともできる。

表⑩

使用者＼語形＼動作	来る				する			行く	
	ワス	キラル	キヤル	キヤハル	シラル	シヤル	シヤハル	イカル	イカハル
Ma (65)	○				○			○	
K (65)	○				○			○	
Z 82	○				○			○	
G (79)	○				○			○	
S 73	○				○			○	
Mo (73)				○			○		○
S 65		●			○			○	
Ma 62	○				○			○	
Ma 57	○				○			○	
Z 53	○				○			○	
G 53	○				○			○	
K 51	○				○			○	
Z (50)	○				○			○	
G (50)		○			○			○	
K (46)	○				○			○	
Mo 46		○			○			○	
Mo (44)				○			○		○
S 38		○			○			○	
S (37)			○			○		○	
Ma (35)		○			○			○	
Ma 31		○			○			○	
G 26		○				○		○	
K 23		○			○			○	
Z 22			○			○		○	
G 21		○			○			○	
Mo (19)			○			○		○	
Z 19			○			○		○	
K (19)			○			○		○	
G 17			○			○		○	

表⑨　動作の主体に対する待遇表現の枠組み

主体が行う動作	話し相手待遇の場合	話題の人物待遇の場合	
		上向き待遇	下向き待遇
行く	イク	イカル	イッキョル
読む	ヨム	ヨマル	ヨンミョル
帰る	カエル	カエラル	カエリョル
言う	ユウ	イワル	イイヨル
来る	クル	ワス キラル キヤル	キョル
する	スル	シラル シヤル	ショル
見る	ミル	ミラル ミヤル	ミヨル
出る	デル	デラル デヤル	デヨル
居る	イル	イラル イヤル	オル
～している	～シテル	～シテラル ～シテヤル	～シトル

六、まとめ

以上、八田方言の待遇表現のうち、動作の主体に対する表現に絞ってその運用の実態を明らかにした。ここでそのまとめをするならば、次のようになる。

まず、同じ素材表現でありながら、話し相手の動作を表す場合と第三者の動作を表す場合とで、待遇表現の枠組みが異っているということである。つまり、話し相手に対する待遇には素材待遇語を欠き、対者待遇語としての文末助詞のみを用いる一方、第三者に対する待遇には素材待遇語を必ず用いるというものである。

次に、各語形とそれを使用する年代との間に密接な関係があるということである。それは特に文末助詞と第三者に対する上向き待遇の部分に顕著である。これは、待遇表現の中で中心的な役割を果たす部分に年代差がはっきりと現れること、すなわち、中心部で新陳代謝が激しいことを示しているものと思われる。

集落内での言語行動を最も強く規定する社会的要因としては、出身地（当集落の生まれであるかどうか）と性別とがあげられる。さらには社会的階層、年齢、血縁関係といったものも重要な要因として働いている。そしてこれらの要因は複雑に絡み合いながら集落内での言語行動を規定している。

なお、当方言の特異な枠組み自体の崩壊現象も指摘できる。それは、話し相手に対しても素材待遇語及び丁寧語が使用され始めているという点に現れている。この現象は、今後他地域との交流が深まるにつれてますます進行していくものと思われる。それはすなわち、集落内の人間関係において「親」の関係が減り、代わって「疎」の関係が増えていることを示すものと言えよう。

最後になったが、被調査者になって貴重な資料を提供して下さった八田集落の方々、アンケートに快く協力して下さった水口町立水口中学校の先生方及び生徒の皆様に心から御礼を申し上げる。

（注）

注1　これは、一九八四年十二月三十一日の時点での数字である。

注2　これは、真田信治先生が富山県東礪波郡上平村真木集落における全員調査の際におやりになった方法である。

注3　楳垣実（編）（一九六二）『近畿方言の総合的研究』参照

注4　第三者の動作中心に用いられる素材待遇語は、松江方言（国立国語研究所『待遇表現の実態――松江二十四時間調査資料から――』一九七一）、九州肥筑方言（神部宏泰「敬語生活推移の軌跡」一九八三）、大阪府八坂方言（松浦信子「大阪府に於ける「ル・ラル」と「レル・ラレル」敬語について」一九六二）など各地に散在する。こうした表現が滋賀県方言全体ではどのような地理的分布をもっているのかという点を、今後の課題としたい。

参考文献

○ 真田信治（一九七三）「越中五ケ山郷における待遇表現の実態――場面設定による全員調査から――」（『国語学』93）
○ 真田信治（一九八三）「最近十年間の敬語行動の変容――五箇山・真木集落での全数調査から――」（『国語学』133）
○ 北原保雄（編）（一九七八）『論集・日本語研究9敬語』（有精堂）
○ 加藤正信（編）（一九八四）『新しい方言研究』（至文堂）